

8:名所旧跡論評

筆者の立場からすると、せっかく信州の山奥まで来訪されたのだから、すこしでも「実のある所」に訪れてほしいと思う。しかしながら、名所旧跡というのは、ときとして誇張され、期待外れに終わる。これは、はなにも日本に限ったことではない。加えて、千曲館の宿泊(滞在)客の約半数はインバウンドという。邦人と外人では興味や関心も異なるし、遠来の滞在客ほど行動範囲も広がるので、取り上げるべき名所旧跡も際限がないが、あえて千曲館から比較的近いところを取り上げる。



信州千曲観光局

②現地観光案内地図:<https://chikuma-kanko.com/kanko-pamphlet/>

8-1:千曲館の温泉は良い

日本の温泉法(国の法律)は甘い。湧出が25°C以上か、水道と異なる成分があれば、なんでも温泉になってしまふ傾向があるが、千曲館の浴場を含め戸倉上山田温泉は名湯に属するといってよい。ことに、千曲館の浴場には、千曲館独自に掘削した温泉と、上山田地域で管理している温泉と、両方があり、ともに素晴らしい。

千曲市の広報によれば、単純硫黄泉・単純硫化水素泉で、泉温:25~60度、「肌に優しく」「温泉らしい」温泉で、「硫黄泉」としては「長野県内でも屈指のレベル」という。無色透明、場所により白濁、緑、日に色変わりするものもある。

③千曲市広報:

<https://www.city.chikuma.lg.jp/soshiki/kanko/kanko/2/2013.html>

千曲近隣に温泉は多く、奈良時代から続く上田の別所温泉が有名だ。筆者はむしろ千曲館の温泉を奨める。好みに拘るが、戸倉上山田に匹敵するのは、上田の室賀温泉さらの湯。公衆の温泉浴場だが、千曲館から15キロ、高低差は差引400M上がって200M下がる感じ、クルマで20~30分の距離にある。入浴して温泉を比較するのも面白い。



④さららの湯:<https://ueda-kanko.or.jp/spot/sasaranoyu/>

8-2:「月の都 千曲」への反応

インバウンド客はもとより、日本人客でも、千曲市一帯を「月の都 千曲」と銘打って訴求するのは、いささか勇気が要ると思う。1999年に国の名勝、2010年に重要文化的景観、2020年に日本遺産に指定されたので、ケチは付けたくないのだが、なかなか理解されにくく心配する。リゾート事業では夕日は商品になるので、西海岸が好まれる。一方、月の出は難しい。23日単位なので暦が安定しない、月の出の時刻も安定しない、加えて、天候も問題になる。月の都のカタログ通りに月の出を鑑賞できる日は、年に幾日もない。

遠来の邦人にせよ、インバウンド客にせよ、このようなことにどの程度の興味をもつのか。筆者はいささか心もとないが、知る範囲でメモしておく。

いまから1500年ほど前、奈良時代、先進国の中・唐にならって律令(法律)が制定され、仏教が伝来、天皇中心の集権体制が整い、国土の開発が行われた。首都奈良から東に向かっていまの秋田・青森くらいまで続く道路があった。これを東山道(とりあえず「とうせんどう」と読む)という。「月の都」を理解するには、この東山道とその支道がどこにあったのかがカギになる。この支道からの月のながめが素晴らしいと指摘したことから、「月の都」の話は始まるからだ。

そのころ、東山道は信濃のどこに設置されていたのか。奈良時代の後の平安時代の考証はたとえば「長野県史



通史」に記述があった。

㊟「信濃の東山道」 <https://adeac.jp/nagano-city/text-list/d100020/ht001700>

当時の地名(駅名)を現在の地名に翻訳されたものを頼りに図化する(図右上)。むろん正確ではない。図中の浦野(青木村・現上田市)にある「道の駅あおき」が一つの目安になろう。

「月の都」はこの「東山道」ではなく、そこから分かれた支道にある。駅のあった覚志(かがし)の地籍に「四ヶ堰円筒分水」という遺跡があるが、そのあたりから東山道の本道から分かれて安曇野市から長野市・新潟方面に向かう(図右中)。その途中に古峠があり、そこから下ると現・千曲市がある。麻績から下る道がそれに近い(図右下)。

たまたま歩いていたときが、905年の月の出るある夜だった。その歩行者(氏名不詳)は素晴らしい月の出の光景を奈良の都に持ち帰り、和歌(日本独自の短詩形)に表現した。これが「古今和歌集」に採録される。

㊟東山道の探訪:

<https://henrileidner.hatenablog.com/entry/2016/05/11/173913>

加えて、東山道は当時の日本の貧しいところを拾つてつながっている。役に立たなくなつた老婆を山に捨てる(姥捨て)伝説が、951年、「大和物語」に記録された。

1550年ごろに姥捨て山斜面に棚田ができるはじめる。その棚田(水田)に月が映るのを誉める者がいた。

1564年、上杉謙信が戦勝祈念の願文に「田毎満月之景」と記した。以下時代が過ぎるに従い、いろいろなエピソードが登場する。単に満月が水田に映っているのではないという意味で、文化遺産になったのではある。

棚田は「山間の傾斜地に階段状に作られた水田」である。「段々畑」に似た「段々水田」である。水田が重なって「棚」のように見えるので「棚田」と呼ぶ。現代にあって、棚田の維持はかなりのコストを要し荒れ放題になるが、古くは貧しい山間地で食料を確保する窮余の一策、生活の智恵であったかと推量する。この「四十八枚棚田」は、あえてその趣旨を保存し形で示したものである(図右)。

なお、棚田は生産者用に通路が整備され見学者も利用できる。ただし歩きである。全体が40Hなので18Hゴルフコースの1/3~1/4程度かと推定する。千曲館から5~6キロ、県道77号と県道338号 経由で、計181m登り計10m下る。現地は標高550Mである。

8-3: 千曲市日本遺産センター、JR篠ノ井線・姥捨駅

千曲市の棚田(四十八枚棚田)に一角に、千曲市日本遺産センター(標高491M)がある。千曲館(同368M)からは歩いて6.6キロメートルだが、アップダウンがあり、130Mほど登って17M下る。さらにそのうえ0.7KM先に、JR篠ノ井線・姥捨駅(同549M)がある。いずれもGoogle Mapによる。クルマならすぐだが、歩くとなると健脚向である。



ところで、「地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリー」を「日本遺産（Japan Heritage）」として認定し、その物語に必要な有形・無形の文化財の保存や活用を支援する。これは文化庁の事業である。千曲市が「月の都」と申請して採択された。その施設が、千曲市日本遺産センターである。

レストランもあり昼食には格好の場所だ。千曲館の顧客の趣味にもよるが、このセンターの趣旨や現況、展示物などは以下のサイトを参考にされると良い。

概要：



<https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/stories/story092/info/>

「月の都」現況:<https://chikuma-kanko.com/2021-05-25/post-26928/>

日本遺産の趣旨：<https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/about/>

また、申請時に文化庁に提出したと思われる資料のひとつが以下のサイトにある。

<https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/datas/files/2023/08/03/ef4d083cec6ba6f45e807f9d0e6c2d3e9a7ac5c2.pdf>

ここから千曲川流域を見下ろしたときの風景が素晴らしい、満月の出に会えればさらに名勝を鑑賞できる。古来から評判であったということで「日本遺産(Japan Heritage)」に採択された。そういうことであれば、さらに使って上空から眺めればどのようになるか。VR(Virtual Reality)がそれを可能にした。ドローンなどを用いて360度撮影した「姨捨の棚田(夏)」「棚田からの夜景と和歌」「鏡台山に昇る中秋の

名月」「中秋の名月」…などを撮影した動画が、専用のゴーグルで鑑賞できる。

注)月の都千曲 VR 映像の完成・公開:

<https://tsukino-miyako.jp/10894/>

姥捨駅は鉄道ファンのあいだではよく知られる。「山の中腹に位置し、全国でも数少ないスイッチバック方式」「駅舎は大正デモクラシー時代の木造設計で、1934年に完成」と紹介されている。なにかと話題になる駅である。

注)スイッチバック方式:急勾配を登坂するためにとられた運転形式。

無人駅で乗降客は 40~60 名/日程度と少ない(2020 年データ)。

駅からの景観の評判が良く、ちなみにホームの向こうに、飯綱・黒姫・妙高少し離れ戸隠の各名山を遠望できる(右図)。むろん推奨すべきは夜景観賞である。なお、付近に、「千曲川展望公園(標高650M)」がある。姥捨駅から1.1KMだが、102Mほど登りになる。

姥捨駅は「自然夜景遺産/甲信越」で紹介されている。



<https://www.yakei-isan.jp/spot/detail.php?id=101>

8-4: 武水別神社と神官松田邸

千曲館から県道 462 号線を北に 6 キロ。ほぼ平坦。前掲の上杉謙信が願文を奉納した神社。神社の格式は諸社(県幣社)で高くはないが、境内はなかなかの規模で、ならびに神官の松田邸は素晴らしい保存され、近世の神社経営に関する貴重な資料が多数保存され、公開している(但し休館日を調べること)。

なお、神官松田邸は上田市に寄付されたもので、公的資金を導入して、的確に保存されている。日本本来の建築様式を知るには格好の文化財である。寛政 3 年以前(~1791 年)の建物に主屋、



天神地祇社、御靈屋、西の土蔵、寛政 3 年から幕末期(1791~1868 年)の建物に主屋の斎館接続部分、斎館、長屋門、大門の塀、表門、味噌蔵、隠居屋、明治期(1868~1912 年)の建物に新座敷、料理の間、裏の長屋、北の蔵、おたやがある。



<https://www.city.chikuma.lg.jp/soshiki/rekishibunkazaicenter/7722.html>

8-5: 荒砥城跡公園、葛尾城跡、屋代城跡、上田城跡…

荒砥城跡公園は千曲館から 2 キロだが、千曲館は海拔 378m、同城跡は 554m、上り坂になる。葛尾城跡は 950m にあり、北国街道/国道 18 号 経由で 13 km だが、登りが計 599 m、道下りが 173 m でかなりきつそう。屋代城跡は 6.5 km で、県道 55 号 経由、ほぼ平坦なルートである。上田城跡は 14.5 km で、北国街道/国道 18 号 経由、計 127 m 登って、計 547 m 下る。

この地域の戦国期の歴史に興味がなければ訪れても意味がないであろう。荒砥・葛尾両城は山城である。よくぞこのようなところに城を作ったということで、訪問者は感心するかもしれない。時代劇に出てくる天守閣がある立派な城ではない。もっとも荒砥城跡は NHK 大河ドラマ「風林火山(2007年)」「江-姫たちの戦国(2011年)」のロケ地になったので、記憶に残る向きもおられよう。



葛尾・屋代両城跡は標識の石碑を除きほぼ何もない。荒砥城跡には土壘、空堀、館、兵舎、櫓(やぐら)がある。上田城は平城で市街地にあり、城跡には櫓・石垣・土壘・堀が現存する。



さて、1550 年頃の戦国時代、越後(新潟)に上杉、甲府(山梨)に武田が勢力を張っていた。武田氏は信濃を攻略し版図に加えようとしていた。上杉氏はそれを阻止しようとした。現千曲・坂城あたりは上杉の勢力下にあり、葛尾城の村上氏、荒砥城は村上系の山田氏、屋代城には屋代氏が居住していた。一方、上田の真田氏は武田についていた。1553(天文 22)年、武田信玄配下の真田幸綱の調略で、屋代氏が上杉を離れ武田に味方した。

そのため村上義清の葛尾城が落城した。武田は屋代政国に荒砥城を与えた。さらに1559(永禄2)年、武田は屋代政国に隠居料として福井・十蔵(戸倉)・新砥の地を宛がう。

一方、1582(天正10)年、織田氏が武田征伐で勝利して武田氏は滅亡するが、3か月後に「本能寺の変」で織田信長が死去する。旧武田領を、相模の北条、三河・遠江の徳川、越後の上杉が争奪戦をする。「天正壬午の乱」である。

注^④<https://www.touken-world.jp/tips/99866/>

注^⑤<https://yaminabe36.tuzigiri.com/kawanakajima2HP/tikuma.htm>

織田支配の屋代秀正は天正壬午の乱後に上杉に従い、上杉の出先、海津城(松代)の副将に任じられたが、主将の山浦景国(村上義清の息子)と対立した。旧上杉系の山浦にしてみれば、武田を支持した屋代を許容できなかった。1594(天正12)年、屋代秀正が徳川氏を支持したため、上杉景勝に攻められ、荒砥城に火を放って逃げ出した…。屋代秀正は結局、徳川の旗本になり生き延び、空城の荒砥は真田幸村の領地になった…。

郷土史的な細かな話なので、ほじくり出すと際限はない。いろいろな史実がでてくるものである。また、郷土にはひいきがつきものだ。たとえば、村上義清は千曲市のとなりの坂城町では英雄になる。

千曲館の顧客がもつ興味次第で中身はおおいに変わるであろう。

8-6:坂井銘酒・raum戸倉宿・温泉の開湯

千曲館からは1.5km、県道55号 経由、ほぼ平坦なルートである。ラウム(raum)は「空間」を意味するドイツ語の単語。江戸時代の宿場の一端を再現した空間といふのであろうか。1596(慶長元)年から酒造事業に参入。現・主力商品は「純米大吟醸白雄」、あるいは江戸時代からの地酒「竇ヶ池正宗」かもしれない。日本酒というよりはライスワインである。酒造りの資料館や地酒の試飲、酒蔵の見学、竹久夢二の作品展示など、話題を提供している。また、中庭の松の太さは、その歴史を物語っている。

<http://www.sakagura.co.jp/sakaimeijo/history.html>

そば割烹「蒼庵」を併設する。蕎麦会席も悪くはないが、丁寧に打たれた蕎麦に、蔵元で精錬された酒をかけながら、酒と蕎麦の香りを楽しむ。こういうことはめったに実現出来ない。これに鮎やイワナを豪快に焼いてもらったらなお良い。厨房は割烹の手捏ね仕事を省略できる。むろん養殖の材料で差し支えはない。食通ぶって天然ものにこだわるのは野暮といふのだ。

<http://www.sakagura.co.jp/kaya/index.html>

上田の別所温泉の開湯が奈良時代とすると、戸倉温泉はかなり新しい。1868(明治元)年に発見され、1894(明治26)年に開削工事に入っている。高温で湯量豊富、硫黄分に恵まれる。この時主役になったのが坂井量之助。坂井銘醸の経営者はその子孫である。河川提内地(堤防の外側)の掘削は水害に見舞われ、その都度工事が難航、資金不足に見舞われがちだ。この戸倉の場合も洪水には手を焼いたようだ。量之助の活躍とリスク負担は、以下の千曲市の広報に詳しい。



<https://www.city.chikuma.lg.jp/material/files/group/34/msf74.pdf>

8-7: 苦渋の「ほろよい銀座」

信州では新興の戸倉上山田温泉は、鉄道の開通、戦後のモータリゼーションで、飛躍的に成長した。大規模団体の大宴会が終わると、街に繰り出し、遊興にときを費やした。その受け皿が「ほろよい銀座通り」だったのである。しかし、90年バブル崩壊を迎え、失われた10年～30年が続き、資産デフレに見舞われると、大広間を埋める団体客は消えてしまった。世代の交代によるライフスタイルの変化も大きい。たとえば、以下の「紀行文」などは興味深い。

㊟<https://wellon.lomo.jp/yado/yado017/yado017.html>

これは戸倉・上山田に限ったことではない。愚痴を言うことになるが、赤坂からナイトクラブも料亭もほぼ消えた。六本木は新宿化し、往年、六本木にあった新業態の店が、むろん形を変えて麻布あたりに生まれている。

上司のかばん持ちして付いて行った料亭を、その部下が偉くなったときに使うとは限らない。あたらしい「人間関係」が、あたらしい「遊び」を求めている感じもする。山奥の「ほろよい銀座」にも救世主となる革新的商人の登場が待たれる。

8-8: あんずの里

戸倉上山田温泉がある地域は、江戸末期の旧・山田村に該当する。その石高 877 石。内、松代藩領分 858 石、智識寺・東国寺・普携寺・波閉科神社各除地は約 3～6 石で計 19 石であった。そもそも松代藩は信濃国水内・高井・埴科・更級の4郡が領地で 14.3 万石。旧・山田村は 1622(元和8年)以降、真田家の支配になった。

真田幸道は信濃・松代藩の第3代藩主。伊予・宇和島藩2代藩主伊達

宗利の長女豊姫が輿入れした際に持ち込んだ「杏」の種子が、千曲の杏のもとになったという。松代藩もコメの生産(水田)に適さない、水はけのよい傾斜地を選んで杏の栽培を奨励したようだ。

杏の開花期間短く基本は1週間、せいぜい2週間程度。温暖化で3月下旬には開花するようだ。6月下旬に果実ができる。千曲館の宿泊者がうまく杏の開花や果実の摘果を楽しめるかどうかは、気候次第だ。千曲の「あんず祭り」は以下の千曲市のサイトに詳しい。

㊟<https://chikuma-kanko.com/tourist-guide/shinanonoosato/>

杏の生産には陽当たり・水捌け・風通しが肝要で、生産量は青森・長野・香川の順に多い(農林省サイト)。世界では、2022年 FAO 調べによると、トルコ 803、ウズベキスタン:451、イラン 305、イタリア 230、アルジェリア 203、以上がベストファイブ(単位千トン)。日本は 96 で 11 位、中国は 53 で 17 位であった。

杏を原材料とする加工食品はマンネリ化しており、意表を突くような面白いものはなかなか見当たらない。おおむね加糖されており甘い。千曲館の顧客の好み次第である。

